

(プレスリリース)

令和3年7月9日

九州大学大学院芸術工学研究院  
株式会社エックス都市研究所九州事務所

「那珂川ウォーター・パークマネジメント研究会（第3回）」5月28日開催（オンライン）のトークセッション要旨と事後アンケート結果のお知らせ

5月28日にオンライン開催（参加申込者約90名）しました「那珂川ウォーター・パークマネジメント研究会（第3回）」のトークセッション要旨と事後アンケート回答結果（回答者数約10名）をお知らせ致します。

※「ウォーター・パークマネジメント」とは、水辺空間をネットワーク化し、行政・民間・市民・大学等が連携して、地域の人々皆で水辺・公園を運営していくという考え方です。

記

1. 資料1 トークセッション要旨
2. 資料2 事後アンケート回答結果
3. 資料3 本プログラム
4. お問い合わせ先 那珂川ウォーター・パークマネジメント研究会事務局

（株式会社エックス都市研究所九州事務所内）

主任研究員 尾藤 文人

住所 〒802-0005 福岡県北九州市小倉北区堺町一丁目2番16号

十八銀行第一生命共同ビル9階

TEL 093-513-2252 FAX 093-513-2253

※プレスの方で取材を申し込まれる方は上記事務局まで、ご連絡下さい。

(以上)

## トークセッション要旨（那珂川ウォーター・パークマネジメント研究会（第3回））

これからの那珂川（福岡・博多）について、どういった視点が大事になるのか？

- FDC（福岡地域戦略協議会）では水都大阪の取組を見本にしてミズベの活性化方策の検討を行った。川辺のカフェや北浜テラスのような川向きの店舗整備は、那珂川の魅力向上において即効性かつ発展性のあるコンテンツと考えた。現在、中洲地区を中心にでも那珂川沿いの川を活かした川向きの建て替えが増えており、魅力向上を更に推進したい。
- 行動のデータについては、FDC のスマートシティ分科会において、会員限定で自宅から出勤、普段の生活の行動履歴、ビッグデータを取ろうと実証実験をした。人がかたまる場所、人が全然いかないところがあった。人がいかないところには魅力があるものを持って行って人を呼ぶようにしたり、人が集まる場所には回遊するようなネタを途中で織り込んで、那珂川全体をぐるっと周れるような魅力向上を図ればいいなと感じている。
- 福岡の特徴として、民間が少し引っ張って大きな絵を描いて官民力を合わせて動いていく本当にいい事例である。
- いろんな規制の制約を考えるとこれは今のルールだと無理なんだよねという話になる。2050 年ぐらいを目指したビッグピクチャーを那珂川の在り方、福岡の骨格となるようなメインストリートの在り方を描いていかないといけない。あれが未来だったらこの方向に行きたいよね、という一つ一つの実験がどんな未来を目指しているのかを共有する時に大きな絵が必要である。
- これから人流データが取れるようになると公共空間も含めて街の形が変わらざるを得ない。移動するもの（人・車）と都市空間との接点が大きく変わると思うので、ビッグピクチャーに組み込んでいきたい。
- 難波のところを「道広場」にしようとしている。道路法改正の中で取り戻そうとしている。道路をシャットアウトして広場にする。民間 27 団体が集まって一般社団法人を作って管理しようとデザインしている。ICT の技術を用いて、広場が出来て周りの商店街が活かされていくのかどうか、人流が変わるのかどうか。中間支援組織を如何に構築出来てそれぞれの場所のプレイヤー（テーマコミュニティと地縁コミュニティ）が支えられる仕組みを色々なまちで考えられたらいいと思う。
- 人流を計測する為にカメラを活用している。安心安全という意味でみんなの正義なので、置く事については抵抗が無い。誰がお金を出して保守運用管理をするかとなると議論が止まる。自治体が監視カメラを置くという事はあまり無い。基本的には市民が必要に応じて監視カメラを置く。防犯の機能だけでなく、AI カメラのようなものも一緒に運用すると、マーケティングや別のサービスも活用できる。個人的にはプライバシーを配慮

するような運用にして、防犯カメラを運用する人と AI カメラを運用する人を分けておく。

- 活用については、回遊のマップを作ってアプリに反映させることを考えている。福岡百景のようなデータを参考にしつつ、With/after コロナに対応できるような、状況に応じて変化するような回遊のコンテンツをワークショップ等で議論・勉強させて頂きたい。

公共空間を誰の手に戻していくのか、情報を誰の手に戻していくのか、だれの為にそれを回していくのか、これから公共空間に関わってくる主体が新しく変わってくる。博多・天神を繋ぐ公共空間を自動車から歩行者へという話があったが、更にそれから一步踏み込んで、情報発信者と歩行者、屋台の方、色んな方達が情報技術も基盤にしながら、発信して行って、更にそこに来た人が新たな楽しみで関係性を作れるといったようなネットワークのあり方、誰が情報を手にして、誰がどう運営していくのか、そういう作り方が大事になってくる。行政や研究機関が一元的に情報を持って管理するのではなく、情報が必要な人たち、例えば、パフォーマーの人が情報を持って、どんなところでイベントをやったら、どんな形で盛り上がるのか、情報の空間をもう一回人々の手に戻していく事が大事ではないか。そうした視点から皆様からお話を聞きたい。

- 福岡市はスマートシティを目指してどのような機能を織り込むか、議論している。
- 情報発信というものが ICT によって新しい形で我々に届くということは素晴らしいと思う反面、まちに来て頂く、まちに行く理由が問われている。現実に出会う素晴らしい空間（パフォーマンス）、このまちでこそ出会う、この風景でこそ体験できるという情報をまちに来たいと思っている方々に伝えていくようになるといいなあと思う。コンテンツ自体も配信されてしまうとすると、極論、天神・博多に行かなくてもよくなってしまふ。どうやって ICT 技術や人の流れの情報を現実の空間を体験したいというフックにすることが大事である。
- 日本は土地の価格は駅近とか利便性だけで決まっている。ちゃんと歩いて楽しくやっている近くのホテルの価格が高止まりしている。利用価値が土地の価格や資産価値に反映されるのはヨーロッパでやられている。価値の見直しや建物のリノベーションも含めていくと存在価値や利用価値を認めていく。その時に公共が今まで安全性の為に人が関わらない空間として整備されてきた。その利用価値が高まると資産価値の在り方が変わってくる。空間のデザインの使いこなしができる空間が身近にあると違う豊かさを享受できる。人流のデータが違う価値に変える都市が持つ変換装置、色んなデータをミックスして空間の在り方という仕組みが作れる。
- アクティブに行動するという意味では、博多・福岡で屋台、ケータリング（どこで出店しているのか）情報が一括して取ることが出来ない。移動手段も含めた総じて自分の行動変容を起こすことに効くということになると、今の人流ではなく、行為を起こした、

アクションを起こした時の人流がどう変わるかという知見が生まれる。

場所が出来てから、どう使うかという議論することと、最初から完成形を提案してもらってそれに決まった感じで頑張っていく。草津の話聞いてみると、まだ、廃川になって何も無い状態のところから、お試して色々やってみたよって、その後の活動に活かされているような感じがする。

- 本当に（疑似体験できる）ここで活動する人、メニューを提供できる人の話は 100%聞く。設備設計から座るところからあなたがそう言ったからこうなりましたというストーリーになるワークショップを開いている。最初に集まってくれた人たちをコアメンバー、クラブメンバー、ビジターに分けている。コアメンバーはクラブメンバーに、クラブメンバーはコアには活動しないがイベントの際にはもてなしに回ってくれる。ビジターの人、お客さんとして来てくれる人も全員会員です、というような情報を出していく。そういう階層が一気に出来ると、ビジターからも俺にやらせろという話になる。フラットな会は機能しない。みんなが平等ですね、という会は機能しない。応援しあえる仕組みを持っている事が重要であり、オープン初日にお客さんで来た人にも見えるという形で、作る段階から関わる人を増やす事が大切である。

水都大阪の取組みは、地場企業はもちろん一般の市民まで一体となって、アイデア出しや催しへの参加も行われてきたようにお見受けしたが、まちづくりの輪を広げるポイントはどういったところにあるのでしょうか？

- 大阪府に登録されている 2,000 団体に「自分のやりたい事」と「困っている事」を聞くアンケート一斉に配った。それを配って活動を共有する日を決める。ワークショップを繰り返す。意外と自分がやりたい事が隣の困っている事を助ける事になる。マッチング・ワークショップをやっていく。

みなさまのご講義の中でもコロナの影響への言及がありましたが、with コロナの時代において、どのようにパブリックスペースの在り方が変わってくると感じていらっしゃるか、お話をお伺いできれば幸いです。

- 天神・博多については、福岡市は With コロナを想定して、容積率緩和というプラスアルファを提示しており、民間の整備を推進している。ほとんどの企業がそれを活用して、建屋の整備をしている。建屋と建屋との間の部分の公共空間について、行政が取組を推進しており、それに併せて民間がまちづくり・イベントをしていく上で、コロナに対する対策をしっかり織り込んだ形で官民連携で盛り上げる、非常に厳しい状

態の部分のいい方向へ変えていくように取り組んでいる。

- 行かなくてもできることが良くも悪くも増えてしまった。行く意味とか行った時の求める体験の質の高さであるとかその場所ならではの体験を求めるといのは、逆に強くなる。そういう面白い空間であるならば、仮にコロナの状況がかなり改善されたとしても、わざわざ足を延ばして行きたいよねあの場所には、あそこの空気感を感じたいよね、そういう魅力がある場所がそれぞれ求められる。オフィスも誰かと会って雑談ができるから行っているのであれば、雑談が出来ないオフィスであれば行かない。公共空間も変わらない。イベントで物凄く人がいっぱい集まっている状態だけがいいのではなく、普段がいい、普段から居心地がいい、いっぱい人が集まっているから成功ではなくて、みんなが居心地よく過ごしているから成功、その評価軸が変わっていくような気がします。
- 色んな首長がテレビに顔を出して、コロナに対する対応で、「全然まちが変わるんだな」という話を意識している若手の人はかなり増えていると思う。この地域のルール（首長の選び方も含めて）自分たちで作る、責任を取る市民で無いと自分たちの命を守れないという感覚を若い人たちが持ったという事についてとても期待を持った。
- 指定管理者の立場から、密になるイベントは出来ない。使いこなしは、どのイベントも4種類・5種類に分けて組んでいる。密度が下がった新たなプログラムや小人数でのプログラムなど楽しみ方が増えていると思う。コロナで見えたのは、密に単一価値で作ったまちが弱かった。多様で密度が少し広がっている、間が空いている、密度をコントロールできる余剰をもっている都市を実現しないといけない。
- 近所の公園では朝からゴミが散らかっている。飲んだ後が残っている。みんなが節度を持ってまちを楽しめば、全然問題がない。たがが外れてしまっている人が一定数いるので、公園を封鎖しなければならない。例えば、公園にカメラがあるとすれば、そういう行動をする人が減るかもしれないが、そこは望むところではない。監視社会を作りたい訳ではなく、うまく節度を持った市民や来訪者が集うようなまちづくりをするために、みんながAIを活用したいと思う。

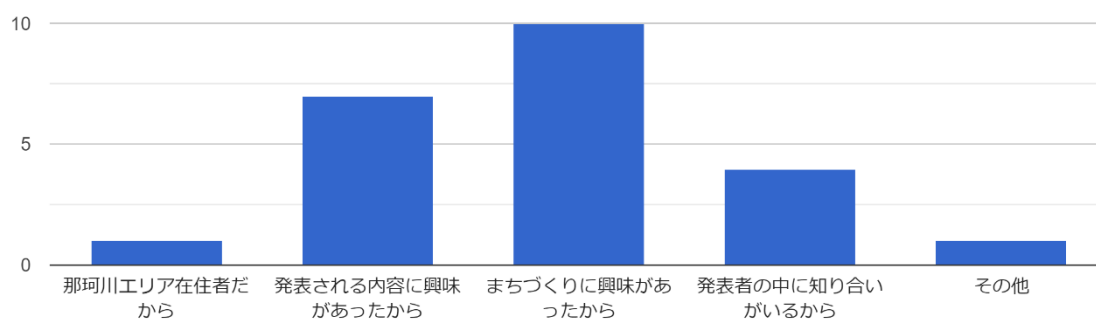
(以上)

## 事後アンケート結果（那珂川ウォーター・パークマネジメント研究会（第3回））

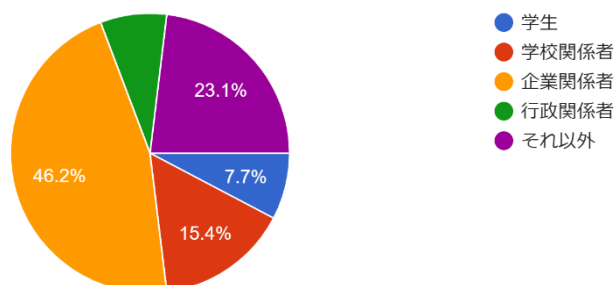
- ・調査方法：インターネット調査（参加登録者（約90名）へアンケートを依頼し、約10名の回答（匿名）を得た。）
- ・調査期間：令和3年5月28日（金）～6月18日（金）

## 【質問内容と回答結果】

◎質問：那珂川ウォーター・パークマネジメント研究会（第3回）に参加された動機をお聞かせ下さい。（複数回答可）※必須回答



◎質問：あなたの属性にチェックを記入してください。※必須回答



◎質問：那珂川エリアに望ましい姿がございましたらご自由にご記入下さい。

- 下流は、大阪の事例に出ていた<地縁コミュニティ>の絡ませ方が難しいところだと感じております（山笠の中洲流はあるが、中洲、西中洲はほぼ飲食）。そうなると、那珂川に関わる主体的に市民とは誰なのか？今後どのように拡げていくのかが、永遠の課題になるかもしれません。（戦前のブラジレイロに文人が集まったのは昔の話。）
- 那珂川番托（中流）の、芸工学部の先生の環境デザインの手伝いに行っています。
- にぎわいと自然環境がともに感じられるとよい。
- 事業者でも生活者でも使いたい人が、一定のルールのもとで自由に使える公共空間
- 日常生活者、通勤者、生産者、サービス提供者、観光などの来訪者などバランスの取れた街。またそれらの属性を超えた多様な出会いの場面が用意されている街。
- なんとなく天神の「端」のようなイメージがあるので、もっと水辺ならではの魅力的なエリアになったらいいなと思います。
- 河川と生活が近い関係だった歴史を紐解いた上で、いつからか地域と疎遠になった場所を、地域に開かれる空間に戻して欲しい。
- 治安が良く家族、友人同士などで楽しく過ごせるまち。
- 行政主動でない基盤が形成されており、取り組みが継続されることが重要であると感じた。

◎質問：全体を通しての感想やお気づきの点がございましたらご自由にご記入下さい。

- 公共空間、その情報を誰に戻していくのか？という締め言葉が印象に残りました。ありがとうございました。
- 川辺の住民の姿が見えない。
- ためになりました。
- ありがとうございました。今回も大変勉強になりました。
- 福岡の街の歴史や、歩行者を優先した道路開発の経緯などが聞けてとても有意義でした。
- スピーカーの皆様の説明がいずれも非常に興味深く、特に誰かに任せるのではなく、自分たちであの場所を新しい場所にしていくことが必要、その動きを担ってくれる方には、責任と、主体性を求めるというやり方は非常に良いなと思いました。お昼時などにランチピクニック等を定期開催などしてみてもいかがでしょうか？コロナ禍で中々難しいこともありますが、定期的にあの場所に行けば、その場所に

想いを持つ人が集まってくる光景を作っていくことが大事なのかな？と感じた次第です。その人たちを核に、そこに利害を感じる人、活動によって利益を見込める人たちを巻き込んでいく、したたかだけど、地に足がついたやり方をしていくことが大事かなと感じました。

- 大変勉強になりました。ありがとうございました。
- ハード整備後の使いこなしのノウハウは、行政には不足すると感じた。

(以上)



趣旨説明

高取 千佳

九州大学大学院  
芸術工学研究院

13:00-13:05 「那珂川ウォーターパークマネジメントとは」

講演1

小泉 邦亮

株式会社九電工開発営業部  
地方創生事業推進課

13:05-13:20 「福岡地域戦略協議会 (Fukuoka D.C.)  
におけるミズベ活性化の取り組み」



講演2

黒瀬 武史

九州大学大学院  
人間環境学研究院

13:20-13:35 「福博をつなぐ都市デザインを振り返る」



講演3

忽那 裕樹

株式会社E-DESIGN  
代表取締役

13:35-13:50 「ランドスケープインパクト  
～風景をつかいこなすデザイン～」



講演4

高野 茂

九州大学持続的共進化  
地域創成拠点

13:50-14:05 「ICTを活用したまちの安心安全と活性化」



—休憩5分(14:05-14:10)—

トークセッション

14:10-15:10 「那珂川の未来とは？」

小泉 邦亮×黒瀬 武史×忽那 裕樹×高野 茂

※視聴いただく方からオンタイムでの質問受付

コーディネーター

尾藤 文人 株式会社エックス都市研究所

高取 千佳 九州大学大学院 芸術工学研究院

日時:2021年5月28日(金)13時00分~15時15分

場所:オンライン(YouTube)によるLive配信

Google フォーム からの申し込み(無料)をお願いします。

<https://forms.gle/qg8rwTYjXjFhgRGd9>